12. 願いをかなえるため

各務原市立鵜沼第一小学校
６年　伴野 理香　　日比野 真帆
５年　岸上 実空
↓
敦賀市立咸新小学校
６年　山本 拓磨

第一章　ラビの思い
「あ～疲れた～」
　そう言ってラビはソファに寝転んだ。ラビはお金持ちの家に住む白いウサギだ。と言っても、好きでここにいるわけではない。ラビの飼い主は事故で入院している。だから近所にあるこの家に預かってもらっているのだ。でも、ラビはこの家の人があまり好きではない。なぜかというと毎日毎日規則正しくしないといけないからだ。朝七時に起きて、八時から夜の十時までお店の台の上で客の接待、十一時にねむるという日がずっと続くからだ。ラビは自由が好きな女の子だ。だから、ある日決めた。
「よし！　この家から出よう。そして自由な日々を外でおくろう」
　翌日、飼い主の目をぬすんで外へ走り出した――。

第二章　海《カイ》の真実
「ぼくは、誰なのだろう？」
　そう言って海は起きた。海は、ふつうの家に住んでいるミニチュアダックスフンドの男の子だ。さっきのように言ったのは、記憶喪失だから。海が覚えているのは、飼い主のカナちゃんが海の近くで拾ってくれたところからだ。海はカナちゃんが大好き。だからこそ失われた記憶をとりもどして、人間と仲良くする方法を知りたかった。
　ある日、海は、
「旅をして、人間と仲良くする方法、いや、記憶をとりもどそう！」
　そう考え、犬用のドアをくぐり元気に外へ出て行った――。

第三章　マリーの願い
「あの子に会いたい」
　今日もマリーは思っていた。マリーは白色の毛をしたネコの女の子だ。あの子とは元飼い主のみかほちゃんだ。今の飼い主は、まかちゃん。マリーは一か月前みかほちゃんとはなればなれになった。遠くに引っこしをしてしまったのだ。ある日、マリーはいい案を思いついた。
「よし！！　みかほちゃんを探す旅に出よう。そうすれば、みかほちゃんにきっと会える！！」
　マリーは、早速、まかちゃんが出かけているすきに外へとび出した――。

第四章　三匹の出会い
　三匹は、それぞれ、港へ向かっていた。
　しかし、誰も、三匹で旅することになろうとは考えてもいなかった。ラビは人目につかない道を、海は海のにおいのする方へ、マリーは、みかほちゃんの行ってしまった方へ走っていた。
「着いた！！」
　一番最初に港に着いたのは、マリーだった。そのあと、ラビと海がすぐに来た。あまりほかの動物に会ったことのないマリーは、ギクシャクしたまま、
「こっ、こんにちは」
　と、二匹にあいさつをした。
「あなたも……家出？」
　ラビがつぶやいた。
「ぼくもだよ。でも、ぼくの場合は記憶を取りもどすためだけどね」
　海が言った。
　三匹は、少し間をおいてしゃべりだした。
「三匹で旅をしたらどうかな」
　提案したのは、ラビだった。二匹は、
「賛成！！」
　と、大きな声でさけんだ。
「必要な物を考えなきゃ。食べ物でしょ、あと水もいるね。他には……」
　ラビが言いかけた時、
「ハイ！！　かい中電灯があるといいと思います」
　めずらしく、海が元気よく答えた。
　そこで、話し合いはストップ。
　それぞれが、必要な物を探しに行った。十分ぐらいたったころ、三匹は同じ場所へもどって来た。
「ここが旅の出発点ね」
　と、ラビが言った。三匹は背中にいろいろな物をしょっている。
　ふと海が言った。
「あそこに船がとまっているよ。あれに乗って旅をしたらどうかな」
　二匹も、
「いいね。そうしようか」
　と賛成し、こっそり船の中にもぐりこんだ―。

第五章　旅の始まり
　三匹は、船にもぐりこむと、そっと辺りを見回した。
「これ、荷物を運ぶ船のようね」
　マリーが言った。辺りにはダンボールがたくさん積まれている。三匹は、この船を管理している人に気付かれないように、少し大きめのダンボールの裏にかくれた。しばら

くすると、海が心配するようにつぶやいた。
「一体、この船どこへ行くんだろう」　★

第六章　期待の船出
　三匹は、期待と不安を持ちながら、船が出航するのを待った。しばらくすると、汽笛が鳴りひびいた。
「よし、出発だ！」
　ラビがさけんだ。
　船は進んで行き、あっという間に町は小さくなり、辺りは暗くなった。
「波が荒くなってきたぞ」
　海が言った。
「雲行きがあやしいわ」
　マリーが心配そうに言った。

第七章　突然の嵐
　突然雨が降り出したと同時に、大きな雷が鳴った。
『ゴロゴロピカー』
　三匹は、大きなコンテナの下にもぐりこんだ。次第に波は高くなり、船は大きくゆれだした。海が言った。
「ダメだ、このままではしずんでしまう」
『ゴゴゴゴ』
　船は大きな音を立てながら、しずんでしまった。

第八章　無人島からの脱出を目指して
　三匹はやっとのことで、丸太にしがみついた。しばらくすると、波がおだやかになった。
「やった。助かった！　遠くに島があるぞ」
　必死になり、島に向かって泳いだ。
「よし、この島で助けを待とう」
　海は男らしく、ラビとマリーを勇気づけるように言った。
「ここは貨物船の航路。必ず船が通るはずだ」
　すると、泣きそうになっているラビとマリーも小さくうなずいた。
「まずは、食べるものを探そう」
「マリーは木に登れるから木の実を、ぼくは森で食べられる物を探す」
　海が言った。
「わたしは、火をおこすまきを集めるわ」
　ラビが言った。
　あっという間に辺りは暗くなり、夜になった。結局その日は食べ物が見つからなかった。三匹は最初の場所に集まった。海が用意してきたかい中電灯をともすと、三匹はおたがいのことを話し出した。そして三匹は、ラビのたいたたき火を囲んだ。

「帰りたいな…」
　マリーがつぶやいた。それを聞いてからは、三匹は一度も口を開かなかった。

第九章　旅のおわり
　翌朝、助けを呼ぼうと海は早起きして、砂浜に木の棒で『ＳＯＳ』の字を大きく書いた。それを見たマリーは、
「そんなことしなくても、こっちの方が効果的じゃない？」
　と言って木に登り、旗を振った。
　それから、三日が経った。無人島には相変わらず何も変化がなく、食べ物もなかった。
　三匹は思った。食べ物のありがたみ、飼い主の優しさ、そして一人では生きられない、支え合って生きているということを。
「よし、この島を三匹で力を合わせて、ぬけ出そう！！」
　マリーは木に登って旗を振り、ラビはたき火をたいてけむりを上げ、海は『ＳＯＳ』の字をもっと大きく書いた。
　こうして三匹が必死で力を合わせていると、船が通りかかった。
「おーい！！」
　三匹は声を合わせてさけんだ。
　船は方向を変えて、こっちに向かってきた。船の汽笛が島に鳴りひびいた。